

# キャスリーン・ジェイコブス 展

2022年5月21日 - 7月16日

同時開催：CADAN 有楽町

2022年5月17日-6月5日



ファーガス・マカフリーは、2022年5月21日から7月16日まで、東京スペースにて Kathleen Jacobs 展を開催、初日の午後5時から7時まで、オープニング・レセプションを開催します。アメリカ人アーティスト、キャスリーン・ジェイコブスによる本展では、近年の大作絵画作品7点を展示します。CADAN 有楽町で同時開催となる展覧会（5月17日-6月5日）では小品11点と大作1点、彫刻6点が展示されます。また、この展覧会に

合わせて、ジェイコブスの作品写真、学術的なエッセイ、作家のインタビューを含む、英・日・中3カ国語の書籍が出版されます。

コロラド州アスペン生まれ。マサチューセッツ州のパイン・マナー・カレッジに入学したジェイコブスは卒業後、国立公園の自然保護官など自然環境に関わる仕事を数年経験した後、ミラノに移り、世界的なデザイン会社ユニマーク・インターナショナルで働くことになりました。ミラノでグラフィックデザインを学んでいたとき、ジェイコブスは前夫であるホアン・ヘイマンと出会いました。その後、数年間を北京で過ごす中、ハイマンの父親で中国の人間国宝と呼ばれる重要な美術家、黄永玉（ホアン・ヨンギョ）のもとでアジアの伝統的美術の訓練を受けます。その後コロラドに戻り、中国で学んだ書道の技法に、蠟を使った絵画、陶芸、溶接などの新しい技術を加え、自然環境と素材の注意深い観察を通して生まれる作品を制作します。

その後、木の幹をキャンバスやリネンで包み、天候や樹皮の質感の違いによって生じる独特の模様を描くフロッタージュという技法で、ジェイコブスの代名詞と言える絵画作品の制作を始めます。彼女はしばしば、異なる木に何度も素材を巻き付け、風雨にさらしながら、時には3年間も屋外に置きます。その後、キャンバスを取り外し、水に浸し、木のフレームを使って平面に伸ばしていく作業を繰り返し、同時にキャンバスを垂直から水平に回転させます。そうして出来上がったモノクロームの幻想的な画面は、見る者をトランス状態に引き込みます。まるで墓石の拓本のようで、これらの作品は、鑑賞者を特定の場所に連れて行く触覚的な場の記録であると同時に、アーティスト、木、鑑賞者が交差することで立ち上がる、別世界の、まったく新しい風景を創り出しています。



ある時はよりニュートラルな白とグレーで、またある時は「JONDA」や「KUMBA」のようにシュールで鮮明な色のパレットで、ジェイコブスの作品は見る者に、親密さと同時に、広大な空間に取り残されたような感覚を与えます。抽象的であるにもかかわらず、それらはジェイコブスが制作した環境にしっかりと根ざしています。実験的なフィールドノート（場の記録）のような役割を果たし、東京の鑑賞者をアメリカに実在する特定の土地の個々の木へと意識を引き込むのと同時に、まるで雲の中に浮かんでいるような感覚を呼び起こします。後者は彼女の飛行機パイロットとして飛行する経験から得た視点でもあります。

ジェイコブスの作品は、人間と自然の暴力的な関係ではなく、道教の哲学から生まれた調和的



な統合の可能性を深く示しています。このようなメッセージは、気候破局が加速している今、特に緊急性を帯びているように感じられます。展覧会カタログに寄せたエッセイの中でエリン・マッカーシー博士は、ジェイコブスの作品が禅宗のシンボルである「円相」を用いていることについて、「空とは底なしの虚無的な無ではなく、あらゆる創造性の源である」<sup>1</sup>と記しています。「色即是空、空即是色」という禅の般若心経のように、制作の途中でキャンバスを横向きにするジェイコブスのプロセスは、「一本の木を見るときに視座は否定され、意識的に樹木を眺める際にあるはずの先入観やある種の観念に左右されない『間柄』的な見方が生まれる」<sup>2</sup>と、マッカーシーは記しています。

ジェイコブスの作品は、14・15世紀の中国山水画の広大なスケール、中国の書道の直線的な性質、ミニマリズムや実験芸術など、異文化の様々な伝統からインスピレーションを得ています。彼女の絵画は、韓国の単色画に見られる遊び心と繰り返しの構図、そして偶然性と時間性が制作において重要な要素であるジャクソン・ポロックやキャロリー・シュニーマンといったアメリカのアーティストたちを思い起こさせます。

CADAN 有楽町で小品絵画とともに展示されジェイコブスの磁器の彫刻は、優美でありながら遊び心がみられる丸太のようです。最初は木の幹の一部を低温焼成の粘土で覆うことを試み、次は磁器土を使用しました。枝とキャンドルの中間のように見え、台座の上に置かれた特異で曲がった彫刻はどこか霊的で儀式のオブジェのようです。本展で展示される絵画が樹皮の質感とキャンバスの直線的な形状を対比させるのに対し、この彫刻は木の枝の繊細なフォルムと不気味なほど滑らかなセラミックの光沢を対比させています。キャンバス作品と同様に、ジェイコブスの彫刻作品は、東アジアの文化的なオブジェの美学を明確に



<sup>1</sup> Erin McCarthy, “In Betweenness with the Trees: Kathleen Jacobs’s Art in Japan” in *Kathleen Jacobs* (Fergus McCaffrey, 2022)

<sup>2</sup> 同上

取り入れており、ここでは中国の磁器が思い起こされます。そして、マッカーシーが書いているように、日本の伝統的な鳥居が自然環境の中で神聖な場所を区切るように、ジェイコブスの彫刻は一本の木の枝でさえ神聖であり、私たちの注意を引くのに値するのだと、鑑賞者に語りかけているようです。<sup>3</sup>

詩人のクリストファー・ケイヒルは、キャスリーンの作品に寄せて、「なぜなら木はすでに抱いているのだから。なにがなくともそれを形作る光」と書いています。<sup>4</sup> キャスリーン・ジェイコブスは、樹木の中にある光を掘り起こし、それを絵画や彫刻の形に変換する卓越した芸術的プロセスをとおして、自身の作品を通して、私たちに自然界の畏怖すべき力と対峙するよう誘います。

### ファーガス・マカフリーについて

ファーガス・マカフリーは2006年の設立以来、元永定正、白髪一雄、高松次郎など戦後日本美術の国際的な評価を確立させるうえで中心的な役割を担ってきました。マーシャ・ハフィフ、ビルギット・ユルゲンセン、リチャード・ノナス、ジグマー・ポルケ、カロール・ラマなど独創性に富んだ気鋭の西洋作家の作品展示も行なっています。日本の美術や文化と深く沿うため2018年3月、ロバート・ライマン展を皮切りに東京・表参道にスペースを開設。ニューヨーク、東京、サンバルテルミ島の3箇所にギャラリースペースを持つ。

### プレスに関するお問い合わせ:

Tel: 03 6447 2660

Email: [tokyo@fergusmccaffrey.com](mailto:tokyo@fergusmccaffrey.com)

Images: 1. Installation view of Jacobs's, *JONDA*, 2020. Oil on canvas. 30 x 30 inches (76.2 x 76.2 cm) at Fergus McCaffrey Tokyo October 2022. © Kathleen Jacobs. Photo by Ryuichi Maruo; 2. Aspen grove, White River National Forest, Colorado, 1988. Photo by Korusch; 3. Kathleen Jacobs, *UUNIX*, 2018. Oil on canvas. 66 x 51 inches (167.6 x 129.5 cm) © Kathleen Jacobs; 4. Installation view of Jacobs's *Untitled*, 2012 at Fergus McCaffrey New York, June 2015. Photo by ShootArt.

---

<sup>3</sup> 同上

<sup>4</sup> Christopher Cahill, "SEEP" in *Kathleen Jacobs* (Fergus McCaffrey, 2022)